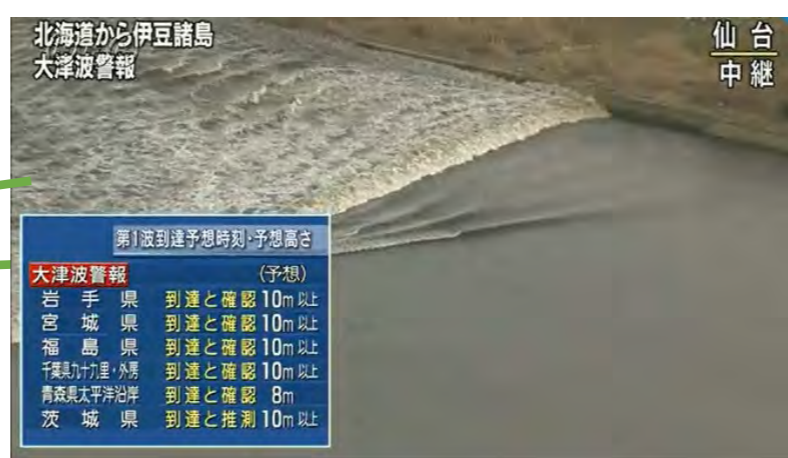
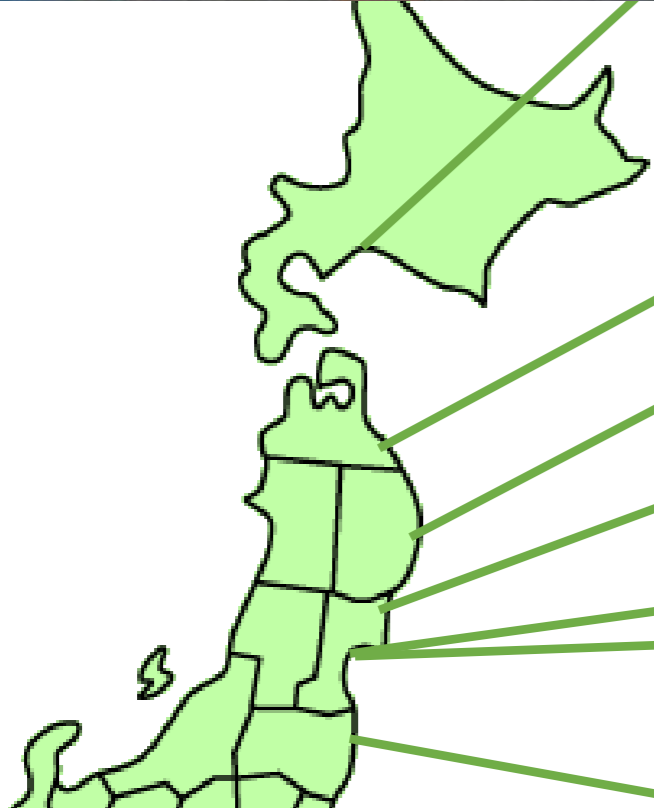


災害報道も初めての経験ばかりだった東日本大震災



【津波の襲来を世界で初めて生中継】

緊急地震速報と同時に始まったテレビ各社の緊急放送は、未曾有の災害を前に終わりが見えないまま継続していくことになりました。沿岸部で被災せずに生き残った各社の情報カメラは、町が、車が、人が津波に飲み込まれ、これまで普通にそこにあった人々の穏やかな生活が奪われていく様子をリアルタイムでとらえていったのです。津波による甚大な被害が発生していく様子を、生中継で伝えたのは世界でも初めてのことでした。

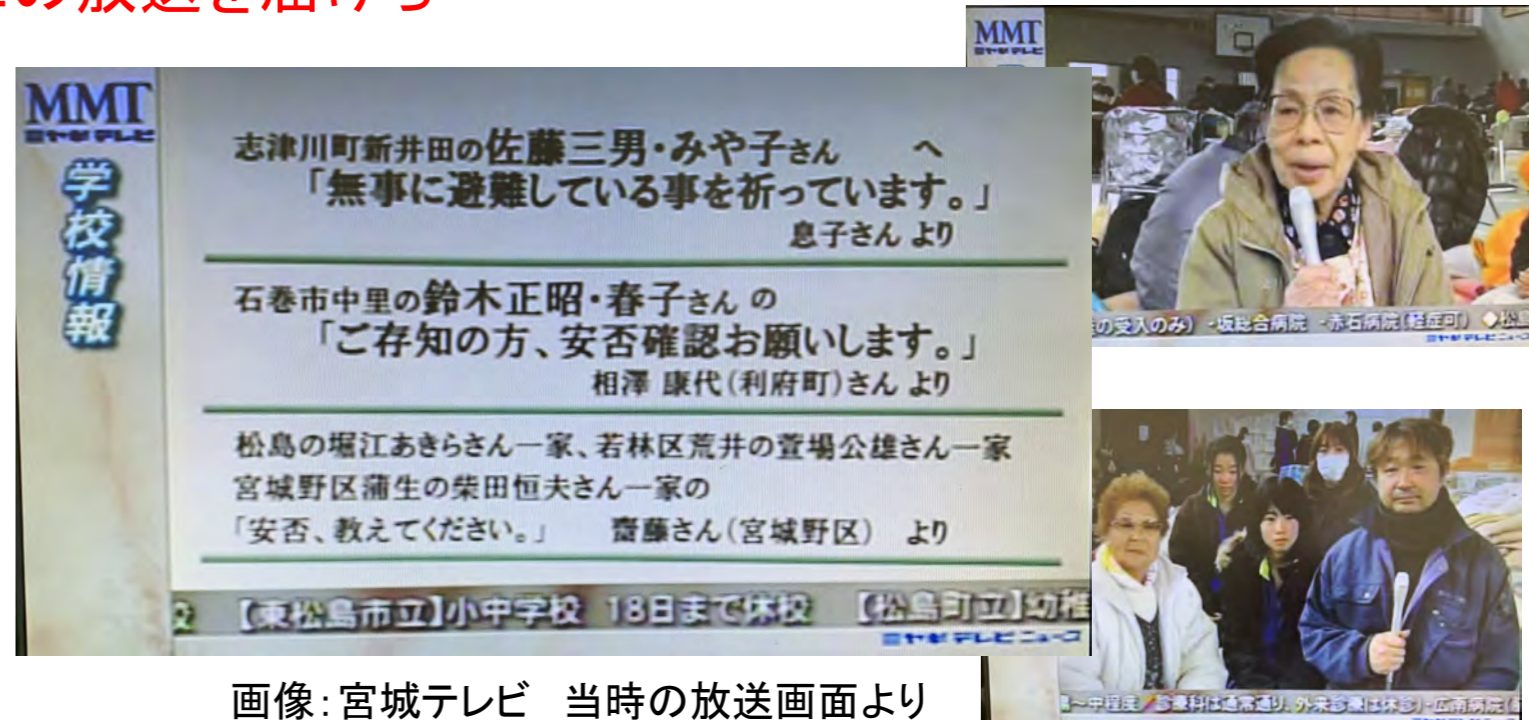
しかし、被災地では**広域で停電が発生しており、カーナビや携帯電話でワンセグ放送を見ることができた人を除き、被災者の多くにはこの放送を届けられません**でした。



画像:NHK東日本大震災アーカイブスより
<https://www9.nhk.or.jp/archives/311shogen/>
 ※情報がまとまっていて、動画を見ることも出来ます

【被災地では安否情報や地元の情報が枯渇していた】

被災地では家族や知人の安否がわからず、情報を求める不安な声が続ぎました。テレビ各社は避難所からのメッセージを放送。**情報がないことが被災者にとっていかに不安につながるのか**を如実に表していました。



画像:宮城テレビ 当時の放送画面より



【南海トラフ地震に向けて..】

津波の被災地の惨状に報道がどうしても集中してしまい、大都市・仙台のライフライン被害の実態は伝えきれませんでした。仙台の製油所の被災などによって東北ではガソリンなどの燃料が枯渇し、十分に給油ができない状態が1か月近く続きました。**ガソリン不足は市民の移動を不自由にしただけでなく、食料などの物流を止め、緊急車両の活動まで制限せざるを得ない事態を招いたのです。「ガソリンこそライフラインだった」**ことを初めて認識させられたのです。しかし、このライフラインストップによる都市市民の厳しい実態はあまり伝えられませんでした。南海トラフの被災エリアには全国の精油所の約8割が集中しています。大阪・名古屋などの大都市で物流が完全に止まってしまう..その潜在的な危険性に警鐘を鳴らすためにも、さらに伝えるべき事項はまだ多くあったと当時の担当者として悔やまれます。

画像:中京テレビ制作 地震特番より

文責:名古屋大学減災連携研究センター 武居 信介